Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13

放課後ダイバーシティ・ダンス記録集

2019-2021

After-school Diversity Dance

文化でつながる。未来とつながる。
THE FUTURE IS ART
Tokyo Tokyo FESTIVAL

はじめに

東京都およびアーツカウンシル東京（公益財団法人東京都歴史文化財団）は、「Tokyo Tokyo FESTIVAL」の中核となる事業を創出するため、広く一般からアイデアを募集しました。斬新で独創的な企画や、多くの人々が参加できる企画など、国内外から 2,436 件の企画がよせられ、その中から選ばれた 13 企画を“Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル 13”として 2019 年秋から展開しています。

「放課後ダイバーシティ・ダンス」は、その 13 企画の一つで、子供たちが主役のプロジェクトです。都内 3 地域を舞台に、それぞれの地域の子供たちが、それぞれの地域で活躍する踊り手の人々から学び、第一線で活躍するプロの舞踊家のナビゲートによって、表現する楽しさ、創るよろこびを体験していきます。

ご挨拶

ひとまずパンデミックのことを脇におけば、ここしばらく日本はダンス・ブームに沸いています。中高生の部活とも連動したストリートダンス。毎年アップデートされる盆踊り。K-POP の文脈からは「カバーダンス」の概念が定着しました。特定のジャンルの流行ではなく、「ダンス」そのものの存在感が増しているのです。

しかし、そこでブームの中心はあくまでダンスを「習う」ことにあり、「作る」ことへの関心は低いと感じます。圧倒的な影響力を持つＳＮＳの最大の役割はダンスの「拡散」、すなわちコピーです。また、創作の実験場である「コンテンポラリーダンス」が、このブームと入れ替わるかのように委縮していったのも象徴的です。

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル 13 の一つとして実現した「放課後ダイバーシティ・ダンス」（以下 ADD）は、子供たちにダンスの多様さをワークショップ形式で体験してもらおうという企画です。ダンスについて広い視野が得られる場のモデルを作れれば、ダンスを深く見つめ、やがては「習う」だけに飽き足らず「作る」ことにも興味を持つような子供の育成につながるのでは、と考えたわけです。

一種の種蒔き作業ですから継続性が鍵です。そこで、講師は地域で様々なダンスに関わる大人たちにお願いしました。大人たちの側に異文化間ネットワークが生まれれば、子供たちは自分の生活世界にあるリアルな文化多様性に絶えず触れることができます。こうした「回路」の構築を目指しました。

この記録集を、ウェブサイトで公開しているドキュメンタリー映像とあわせてご覧頂き、ＡＤＤの試みを追体験して頂けたら嬉しく思います。また、身近な地域で実践してみたいと思って頂けたら、ぜひご連絡ください。お待ちしています。

末筆ながら、本プロジェクトの実現にお力添え頂いた全ての皆さまにお礼を申し上げます。とくに実施地域である港区、国立市、日の出町、および各実施拠点のスタッフの皆さま、そして講師を快くお引き受けくださった皆さまに、深く感謝いたします。

「放課後ダイバーシティ・ダンス」ディレクター
武藤大祐

放課後 ダイバーシティ・ダンスとは

「放課後ダイバーシティ・ダンス」（After-school Diversity Dance＝ ADD）は、子供たちにダンス（舞踊）を通じて文化多様性を体験してもらうプロジェクト。港区、国立市、日の出町の3ヵ所で同時展開してきました。

子供たちは、ストリートダンスから国内外の伝統舞踊まで多岐に渡る舞踊をワークショップ形式で習い、それをもとに振付・創作にも挑戦してもらいました。

講師は主に、実施地域にお住まいで、さまざまな舞踊に関わっている方々です（ADDでは「地域の先輩」と呼んでいます）。地域の皆さんに代わるがわる登場して頂くことで、子供たちは、自分の暮らす街に根付いた多彩な舞踊と、それを支える人々に出会います。これにより、舞踊の形式や技術だけでなく、その背景にある人の営みや価値観に触れ、より深く地域文化のあり方を実感してもらうことができます。また講師を務める大人たちの間でも異文化接触が生まれることになります。

他方、こうして習ったさまざまな舞踊を土台として、自分たちでオリジナルの振付を考え、作品を創作するにあたっては、第一線で活躍するプロの舞踊家の皆さんに指導をお願いしました（ADDでは「派遣舞踊家」と呼んでいます）。

ＡＤＤのプロセスは大まかに三つの段階にわかれます。

リサーチ

地域にどのような舞踊文化があるか、
リサーチャーが探ります。
またそれに基づいて講師（「地域の先輩」）
を依頼します。

ワークショップ

講師（「地域の先輩」と「派遣舞踊家」）の
皆さんによるワークショップを実施します。

創 作

「派遣舞踊家」の指導のもと、子供たちが
オリジナルの振付を考え、作品をつくります。

派遣舞踊家

リサーチャー（振付アシスタント）

地域の先輩

◯ プロジェクトの仕組みと用語

派遣舞踊家

第一線で活躍するプロの舞踊家。
ワークショップに加え、さまざまな舞踊を体験した子供たちがオリジナルの振付を考える過程とその成果発表を監修します。

（港区：尾上菊之丞、国立市：砂連尾理、日の出町：菅原小春）

踊りの指導と
成果発表の監修

子供たち

踊りの指導と
成果発表のサポート

リサーチャー

地域に根差した多様な舞踊文化を、足を使って調査。イベントを見学したり、稽古に参加させて頂いたり、詳しいお話を伺ったりします。またワークショップの講師をつとめる「地域の先輩」への登壇交渉や、実施の際にはファシリテーターの役目も担います。

（港区：福留麻里、国立市：木村玲奈、日の出町：中西レモン）

踊りの指導

講師として指導を依頼

地域の先輩

地域でさまざまな舞踊を実践されている方々。
子供たちに初心者向けのワークショップを行って頂きます。

（港区：p.14参照、国立市：p.24参照、日の出町：p.34参照）

◯プロジェクトフロー

1 リサーチ
地域のダンス文化をリサーチ

2 ワークショップ
地域の先輩、および派遣舞踊家、
リサーチャーが講師
※ 新型コロナウイルス感染症拡大の影響により一部中止

以下、新型コロナウイルス感染症拡大の影響によりすべて中止

3 創作
子供たちをサポートしながら
ダンス作品をつくる

4 ショーイング
地域ごとに、住民に身近な会場で
作品を公開

5 劇場公演
3地域の作品を一挙上演

当初は、3地域で子供たちが作った作品（左図5）を集め、都内の劇場で一挙上演する予定でしたが、コロナ禍の影響により大幅な変更を余儀なくされました。すなわち、作品としての完成を目指すのではなく、あくまでも「創作」のプロセスを部分的に体験するワークショップへと実施方針を修正し、その成果を保護者・関係者向けに発表する形としました。また、ワークショップも一部はオンラインで実施せざるを得ませんでした。このように多くの制約がありましたが、それでも子供たちには、ただ踊り方を習うだけでなく、自分なりの発想を形にする貴重な経験を積んでもらうことができました。

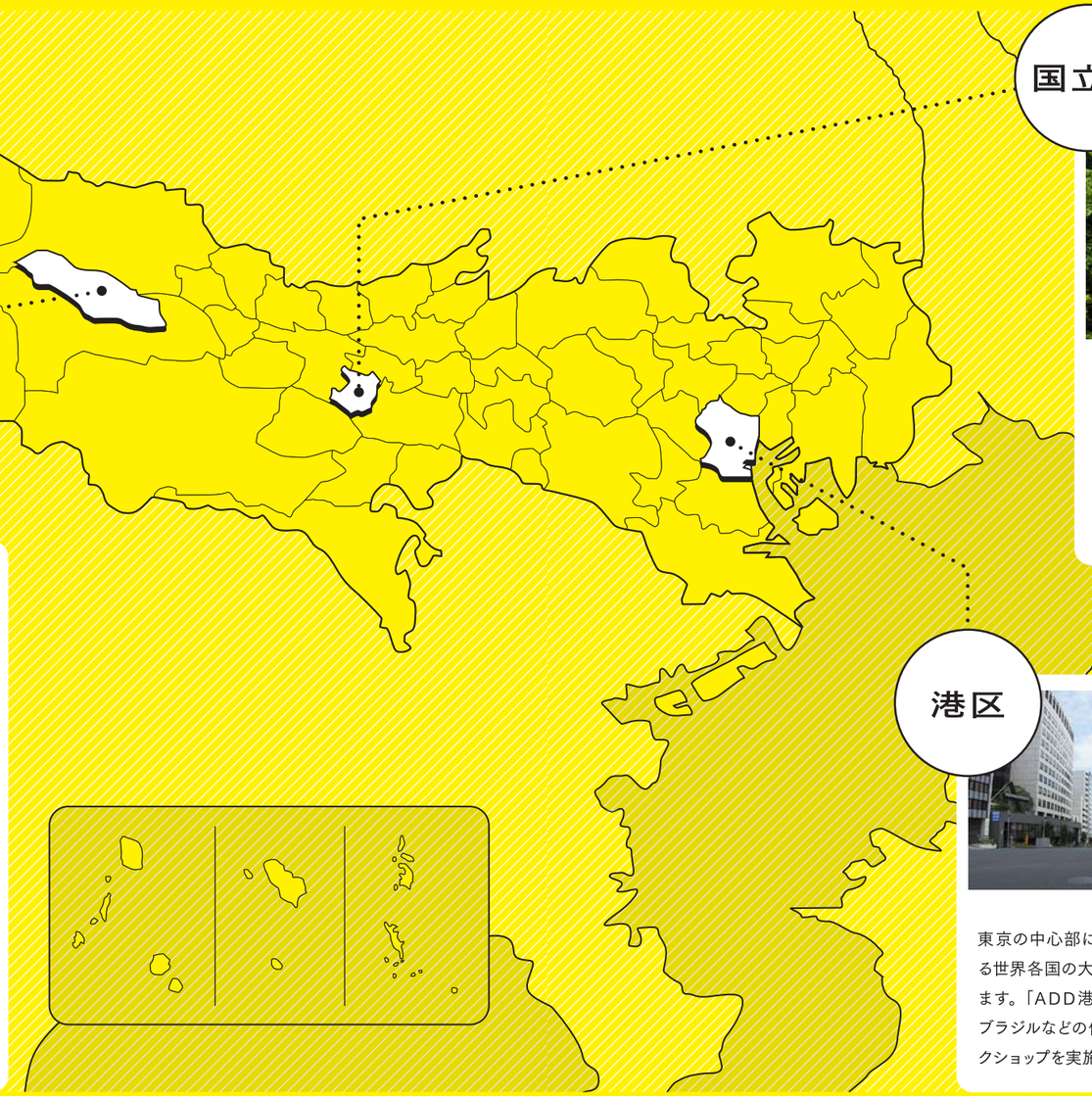
ZOOMを通して、一人一人が考えた動きを持ち寄り、ダンスをつくる
（ＡＤＤ日の出町）

再始動

3 創作ワークショップ
地域の先輩、および派遣舞踊家、
リサーチャーが講師

4 発表会
ワークショップの成果を関係者向けに発表

実施マップ



国立市

左：国立駅前の「大学通り」／右上：団地と公園／右下：谷保天満宮

多摩中部に位置する国立市は、人口約76,000人。国立駅前から伸びる大学通りと桜・イチョウの並木がシンボルです。一橋大学を中心に文教地区として開発された経緯があり、郊外の住宅地として知られますが、東日本で最も古い天満宮である谷保（やぼ）天満宮も有名です。「ADD国立市」の拠点である「くにたち市民芸術小ホール」に集まった子供たちが、フラダンスやラクロス、トリニダード・トバゴの民俗舞踊などを体験しました。

→「ほうかごダンス隊」（p.17〜）

日の出町

左：山上から町を見下ろす／右上：鹿野大仏（ろくやだいぶつ）／右下：平井のお祭り

西多摩郡に属する日の出町は、人口約16,500人。豊かな自然を活かした林業やセメント製造業などが根付いている一方で、ハイキングコースや温泉などが観光客の人気を集めています。また、いくつもの郷土芸能が盛んに営まれる伝統文化の町でもあります。「日の出町立志茂町児童館」を「ADD日の出町」の拠点として、地元の多様な芸能、ストリートダンス、バレエの初歩などを体験するワークショップを実施しました。

→「ほうかごダンス教室」（p.27〜）

港区

左：飯倉交差点／中：東京タワー／右：有栖川宮記念公園

東京の中心部にある港区は、人口約146,000人。メディアやIT企業、外資系企業の他、日本にある世界各国の大使館およそ140のうち約半数が集中しており、多様な出自の人々がともに暮らしています。「ADD港区」は「港区立麻布子ども中高生プラザ」を拠点として、アフガニスタンや中国、ブラジルなどの伝統舞踊から、現代のダンス、そして地域で盛り上がっている盆踊りなど多彩なワークショップを実施しました。

→「ほうかごダンス×ダンスremix」（p.7〜）

初めて体験するフラメンコの12拍子。繰り返すうちに不思議となじんでくる

ADD港区

プロジェクトニックネーム

「ほうかごダンス×ダンス remix」

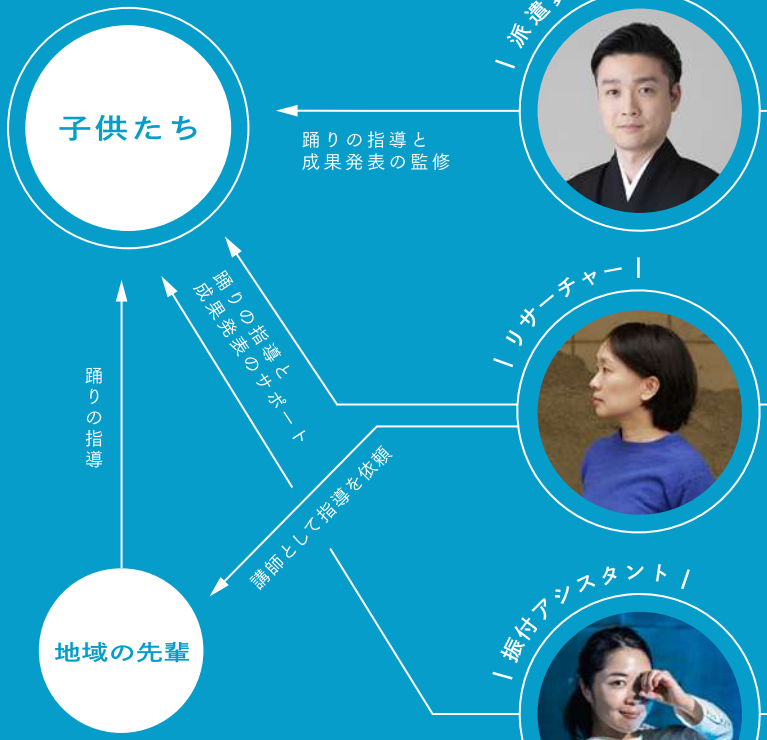
◯ 実施拠点

港区立麻布子ども中高生プラザ（東京都港区南麻布 4-6-7）

麻布子ども中高生プラザは、赤ちゃんから高校生世代を対象にしている施設。児童館、学童クラブ、こそだてひろば、ゆうぎしつ、創作活動室、音楽室、学習室、アリーナ（体育館）、屋上にはローラーブレード場といった多様な施設を備え、各世代向けに様々な催しが企画されている。自然豊かな有栖川宮（ありすがわのみや）記念公園のほど近くに位置し、建物の1階には「区立本村保育園」、3階には「区立ありすいきいきプラザ」（高齢者福祉施設）が入っている。

https://azabu-plaza.jp

◯ プロジェクト構成



→ p.14 に詳細

おのえ きくのじょう
尾上 菊之丞 （日本舞踊家・振付師）

尾上流四代家元。2011年、尾上流家元を継承し三代目尾上菊之丞を襲名。流儀の舞踊会「尾上会」をはじめ「逸青会」（狂言師茂山逸平氏との二人会）、古典芸能オンラインサロン「K2 THEATRE」（藤間勘十郎氏と共同）を主宰。日本舞踊界初の全編ロケ作品『地水火風空そして、踊』では作・演出、フュギュアスケート『LUXE』では監修・演出を勤める。振付師としては『風の谷のナウシカ』、スーパー歌舞伎II『ワンピース』等、新作歌舞伎を手掛ける。

ふくとめ まり
福留 麻里 （ダンサー・振付家）

2001年より新鋪美佳と共に身長155cmダンスデュオ「ほうほう堂」として活動。独自のダンスの更新を試みる。2014年より個人活動開始。劇場での作品発表、川原、公園、美術館、道等、様々な場所でのパフォーマンスやワークショップ、他分野作家との共同制作を継続的に行ない、いくつもの関係性とそのやりとりから生まれる感覚や考えや動きを見つめ紡いでいる。2019年からだに対する小さな指示書をSNSで配信する「ひみつのからだレシピ」をBONUS（木村覚）と共同企画。「WheneverWhereverFestival」、「ダンス作戦会議」メンバー。2020・2021年度セゾンフェローI。2020年より山口県在住。

ストウ ミキコ （振付家）

桐朋学園短期大学芸術科演劇専攻卒業。“あなたと私のコラボレーション”をモットーに、映画やMV、おまつりなどの振付を手がけている。ジャンルの異なるアーティストや一般の人たちとの共同作品を多数発表。人間関係と出会いをテーマにしたワークショップを全国の小中学校、支援学校、大学、地域プロジェクトなどにて開催している。「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2010」ファイナリスト。「第4回 キッズワークショップアワード」優秀賞受賞。

制作：岩中可南子、市川喜愛瑠　ロゴイラスト：Aokid
共催：港区麻布地区総合支所
協力：公益財団法人児童育成協会、港区立麻布子ども中高生プラザ

ADD港区
リサーチ＆ワークショップの記録

福留麻里＋ストウミキコ＋武藤大祐

1 リサーチ

各国の大使館が集まり、外国人も多く、まるで東京の中に「世界」があるような港区。ADD港区の拠点「麻布子ども中高生プラザ」のある麻布を中心に歩きながら、色々な方のご協力を頂いたり、縁が繋がっていくことで、さまざまなダンスを見つけることができた。

まずは情報収集のため、区民センターや図書館へ。色々なダンス教室の案内や、いくつかの面白いチラシが目に留まった。「港区ワールドフェスティバル」は、大使館をめぐるイベント。大使館では、各国に伝わるダンスの話を聞くことができた。東京タワーでは世界中の伝統舞踊が見られるイベントもあり、とくにウズベキスタンやアフガニスタンのカラフルな民俗舞踊が印象深い。戦争のイメージが強い中東地域だが、人々の生活に根差した文化の豊かさにふれることができた。

港区では盆踊りが盛り上がっているというのも意外だった。「港区発掘ご当地曲盆踊り大会」というチラシを見つけ芝公園に出かけると、大勢の人が集まって「芝浦音頭」「東京五輪音頭2020」などを立て続けに踊っていた。「人と地域を元気にする盆踊り実行委員会」代表の北島由記子（きたじまゆきこ）さんに教えて頂き、後日、練習会にも足を運ぶと、お年寄りから会社員の方、中学生まで50～60名ほどの方が、2時間半ほぼぶっ通しで踊りまくっていた。

国際色豊かであると同時に、日本の伝統文化も生き生きと受け継がれる港区の多面性が、「踊り」を通して浮かび上がってきた。

一つのビルに大使館がいくつも

「港区発掘ご当地曲 盆踊り大会」。司会進行は日英バイリンガル

岡啓輔さんが自力で建てた鉄筋コンクリートの「蟻鱒鳶ル」

2 ワークショップ

ADD港区の拠点は「麻布子ども中高生プラザ」。幅広い年齢層、多様な国籍の子供たちが放課後に集まり、賑やかだ。遊びやスポーツ、ゲームの施設がある他、イベント、クラブ活動も充実している。そうした中にADDのワークショップ「ほうかごダンス×ダンスremix」を加えて頂き、実施した。事前に申し込みしてくれた子だけでなく、「何やってるの～？」と通りすがりに興味を持ち、参加する子も多かった。

プラザのスタッフ渡邉千里（わたなべ ちさと）さんは、「子どもたちの『やってみたい』という気持ち」が何より大切、それを引き出すには「楽しそうに魅せる大人の存在がとても重要」と、自身も楽しみながら関わってくださった。

港区には実に様々なダンスに関わっている方がいて、ワークショップも多彩な内容になった。

地域に根差した盆踊り文化を盛り上げている北島由記子さんには色々な盆踊りを楽しく教えて頂いたほか、手話活動を幅広く行い、ダンスも取り入れている小島泉（こじま いずみ）さんをご紹介頂いた。手の形で意味を伝える手話は、日本舞踊にも通じるところがある。

フラメンコの正木清香（まさき さやか）さんには、カホン奏者の平島聡（ひらしま さとる）さんとともに、基本の12拍子のステップを教えて頂いた。最初は戸惑っていた子供たちが、延々と繰り返す内に自然と動きが揃い、フラメンコならではの勢いのある動きになっていくのはやはりダンスの不思議なところだ。

岩井隆浩（いわい たかひろ）さんにはポッピング（ストリートダンスの一つ）の基本で、筋肉を弾くようにして動きを突然止める技を教えて頂いた。空中で物をつかむイメージを持つのがコツ。覚えると子供たちはすぐにそれを使って遊べる（踊れる）ようになった。

白波瀬立（しらはせ りゅう）さんに教えて頂いたカポエイラは、踊りと格闘技が混ざったブラジルの伝統文化。基本技を習得後、ビリンバウという打弦楽器のリズムに乗り、一対一で動きの掛け合いを行う

港区は盆踊り好きのコミュニティがとても活発。子供たちへの稽古もパワフル

カポエイラの基本ステップ「ジンガ」を習う。体を目いっぱい大きく使い、リズムに乗る

アフガニスタンでは結婚式などで人々が楽しむ輪踊り「アタン」。どんどん加速していく

「ホーダ」に挑戦。

アフガニスタン大使館のアシュラフ・バブリさんは、最初は「自分は踊りが得意なわけじゃない」と仰っていたが、当日はパリッとした伝統衣装で、盆踊りに似た民俗舞踊「アタン」を教えてくださった。上村菜々子（かみむら ななこ）さん率いるアフガニスタン舞踊グループ「シャランシャラン」にも踊りを見せて頂いた。子供たちには華やかな衣装が大人気、終了後は写真撮影の列ができた。

バレエ経験のあるお母さん三人組「Uni mama」の皆さんには「からだワーク」を、またリサーチャーの福留麻里も「遊び」の延長線上で動いていくなど、いわゆる「ダンス」になる手前の部分も子供たちに味わってもらった。

そして日本舞踊は尾上流家元・尾上菊之丞さん。足袋を履き、挨拶の仕方や扇子の扱い方などの作法から踊りへの心構えを学んだ。菊之丞さんの折り目正しく繊細な立ち居振る舞いは、子供たちにダイレクトに響いていた。日本舞踊は所作で意味を表し、それを組み合わせて物語を演じる。扇子で「雪が降る」「風が吹く」といった様子を表現するのを楽しみながら、日本の伝統文化と美意識を体験してもらった。

また今回、上述した方々の他に、新型コロナウイルスの影響でワークショップの実施は叶わなかったが、沖縄出身で琉球舞踊を教えていらっしゃる濱田（はまだ）ひろみさん、三田でセルフビルドの建築「蟻鱒鳶ル（アリマストンビル）」を建てながら、舞踏家でもある岡啓輔（おか けいすけ）さん、プラザに通う小学生のお父さんであり、ブレイクダンサーでもある川上直人（かわかみ なおと）さんなど、ダンスを通じて個性豊かな地域の先輩に出会うことができた。

ワークショップ後に
子供たちにとった
アンケート

日本舞踊は演劇的な要素も強いので、他の踊りとの違いが際立つ。尾上菊之丞さんから直々に教えを受ける子供たち

3 再始動：創作ワークショップ

港区では7回目のワークショップの後、コロナ禍により中断を余儀なくされ、1年4か月の休止期間を経て再始動。4日間の短期プログラムを組み、参加する子供たちを募集した。集まった6人の内、4人は初めての参加だった。

福留麻里からバトンタッチしたストウミキコがファシリテーターとなり、子供たちは白波瀬さん（カポエイラ）、正木さん（フラメンコ）、小島さん（手話）、ファン・レイさん（中国古典舞踊）、そして菊之丞さんからそれぞれ初歩を習った。初登場のファン・レイさんには、リズムを軸とする他の踊りとは対照的に、呼吸を意識しながら流れるように動く踊りを教えて頂いた。さらに菊之丞さんの発案で「鳥獣戯画」を発表会の全体モチーフに据えることになり、それぞれの踊りの中から動物を模した動きも覚えた（フラメンコは牛、カポエイラは猿と蛙、中国舞踊は鳥、日本舞踊は兎と狸）。

各回の冒頭では講師の皆さんによる実演に加え、踊りの歴史背景なども紹介して、文化としての側面にも興味を持ってもらった。

小さい頃から国立舞踊団で寮生活をしていたレイさんが子供たちに踊りを教える

手話を体験する。日本舞踊と似ている…と菊之丞さんも興味津々

4 発表会

プラザ内の体育館（アリーナ）に舞台と客席を設営し、保護者や関係者を観客に招いて、子供たちが習った踊りを一つずつ講師とともに披露。冒頭では手話で「みなとく ちょうじゅうぎが」とタイトルを表した。

「鳥獣戯画」にちなんで墨画風の色に染めた揃いの衣装をつけ、照明の当たる舞台に立った子供たちは、カホンやギター、太鼓などの生演奏をバックに、程よい緊張感のもと集中したパフォーマンスを見せた。後半はゲーム形式で、習った動きをランダムに選んで踊ったのち、フィナーレでは子供たちオリジナルの動物の動きで円舞、客席を大いに沸かせた。

大人も子供も一緒になって、それぞれが未知の領域に飛び込み、楽しむ

ADD 港区ワークショップ「ほうかご ダンス × ダンス remix」

会場： 港区立麻布子ども中高生プラザ、港区立ありすいきいきプラザ
対象： 小学生〜高校生世代 ※港区立麻布子ども中高生プラザの利用登録者
参加費： 無料・要事前申込

参加募集コピー：

日本と世界のいろんな踊りを remix!? ダンスワークショップ参加者募集！
第一線で活躍するプロの舞踊家と、港区でダンスに関わる様々な方々からいろんなダンスを習うワークショップ。日本と世界の多様なダンスを体験できます。カッコいいダンス、美しいダンス、伝統のあるダンス、「これはダンス？」なダンス。沢山のダンスや考え方を吸収したら自分だけのオリジナルダンスをつくれるかも？
ダンス経験があってもなくても、国籍や言葉が違ってもOK。麻布子ども中高生プラザに登録した子供たちは参加できます。

ワークショップ募集チラシ（英語版）

リサーチ

2019年4月〜9月

ワークショップ

第1回　2019年11月29日（金）　講師：福留麻里（コンテンポラリーダンス）、北島由記子（盆踊り）
第2回　2019年12月10日（火）　講師：Uni mama（からだワーク）、小島泉（手話）
第3回　2019年12月19日（木）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、正木清香（フラメンコ）× 平島聡（カホン）
第4回　2020年1月11日（土）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、岩井隆浩（ポッピング）
第5回　2020年1月20日（月）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、福留麻里（コンテンポラリーダンス）
第6回　2020年1月29日（水）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、M.アシュラフ・バブリ＆Mastana／上村菜々子（アフガニスタン舞踊）
第7回　2020年2月5日（水）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、白波瀬立（カポエイラ）
第8回　2020年2月28日（金）　講師：岡啓輔（舞踏）［中止］
第9回　2020年3月8日（日）　講師：濵田ひろみ（琉球舞踊）、ファン・レイ（中国古典舞踊）［中止］
第10回　2020年3月22日（日）　講師：川上直人（ブレイクダンス）［中止］

ワークショップ（再始動）＋発表会

第1回　2021年6月1日（火）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、正木清香（フラメンコ）
第2回　2021年6月6日（日）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、ファン・レイ（中国古典舞踊）、白波瀬立（カポエイラ）
第3回　2021年6月8日（火）　講師：尾上菊之丞（日本舞踊）、小島泉（手話）
第4回　2021年6月13日（日）　関係者向けの発表会

ADD 港区ワークショップ講師「地域の先輩」

北島 由記子 きたじま ゆきこ

「人と地域を元気にする盆踊り実行委員会」代表、西麻布霞町町会理事・婦人部長、港区観光大使。主に港区の古いご当地盆踊り曲を発掘、保存、継承しながら港区と共催で盆踊り大会を2015年より開催。大規模震災発災時の共助・協助に繋げる縁作りのため、また認知症予防のためのご当地盆踊り曲を制作。練習会を開催 。

Uni mama ゆにまま

膳真由子、大島彩、市川喜愛瑠による現役ママ３人のユニット。「からだと仲良くなる」ために、正しい姿勢や楽しいエクササイズまで、自然とこども達がからだについての理解が深まり、からだが楽になれることをお伝えします。

小島 泉 こじま いずみ

高校生の時に友人に手話講習会に誘われて始めたのがきっかけ。子育てが落ち着き、5年前に港区社会福祉協会で開催された手話講習会を探して参加。初級、中級、上級、養成コース4年間参加。その後、田町の障害者福祉会館で毎週火曜日午後に開催されている手話サークル「て」にて活動。少しでもろう者の方にお手伝いや、コミュニケーションができたら、少しでも多くのかたに手話を知ってもらいたいという思いを持って活動中。

正木 清香 まさき さやか

幼少よりクラシックバレエを学ぶ。大学でフラメンコと出会う。2003年～05年渡西。ANIF日本フラメンコ協会新人公演で「準奨励賞・話題賞」、マルワ財団CAFコンクールで「第3位」「コンセルバトリオ賞」をW受賞。現在都内で教室を開講。つくば国際美学院 講師。大道芸フラメンコグループ「オジロス」のリーダーとしても活動中。

平島 聡 ひらしま さとる

フラメンコ・カホン奏者。またパーカッショニストとして、各種演奏会やライヴ、レコーディング、演劇や語りの楽師、ダンス伴奏（コンテンポラリー、モダンバレエ、ホートン・テクニック・クラス、舞踏）など、多岐に渡る国内外での活動を展開している。

岩井 隆浩 いわい たかひろ

ダンスチームRhythmalismで活動。コンテストにて成績を残す。国内外で、治療院を経営し、ダンサーに治療を提供。「ケアクル」では、電子カルテのサービスを展開し、業界にITを持ち込んでいる。「芸術家のくすり箱」では、ドクターと共に医療チームを組み、現場にヘルスケアを届けている。

M. アシュラフ・バブリ

2009年3月、日本語と日本文化を学ぶためにアフガニスタンから来日。2011年7月、駐日アフガニスタン大使館に就職、様々な分野を担う。現在は大使館にて財務・総務部を担当。2017年頃からは、大使館での文化的行事や国際的なフェスティバル参加の際に、アフガニスタンの伝統的な踊り「アタン」を日本人に教えたり、一緒に披露している。

Mastana／上村 菜々子

ますたな／かみむら ななこ

画家とダンサーの2つの顔を持つ。生演奏での即興表現を得意とし様々な演奏者と共演、日本で唯一のアフガンミュージック ユニット「ちゃるぱーさ」との共演を機にアフガニスタンの踊りに興味を持ち理解を深めている。

白波瀬 立 しらはせ りゅう

NPO法人カポエイラジェライス代表理事兼インストラクター。過去一年間の滞在を含む度々のブラジル修行を行う。2015年より赤坂、秋葉原にてカポエイラ教室を開講。英語とポルトガル語に堪能。

ファン・レイ

中国人民解放軍芸術学院中国舞踊専攻卒業。古典舞踊、民族舞踊など様々な中国舞踊を学ぶ。卒業後は国家級ダンサーとして中国の大規模な文化芸術公演に出演。国の代表として海外訪問活動にも参加。2009年の来日以降、様々な日中友好イベント活動に参加。2019年から東京STUDIO GEM GARAGEとコラボした「中国舞踊教室」を開催中。

ADD港区鼎談

「経験は必ず積み重なっている」

尾上菊之丞 …… 派遣舞踊家

×

福留麻里 …… リサーチャー

×

ストウミキコ …… 振付アシスタント

―― 港区はさすがに幅広い踊りが並びましたが、全体を通していかがでしたか。

尾上菊之丞：まず自分たちが知らない踊りにたくさん出会えましたね。最初に興味を持ったのはアフガニスタンの踊りで、いったいどんなものなのかなって。カポエイラも、踊りなのか遊びなのか、はっきり分けられなくて面白い。あまり馴染みのない踊りに触れることに、大人としてもすごく興味を持ちました。

福留麻里：そうですね。子供たちにも、ヒップホップやバレエとはまた違う色んなダンスがあって、しかも自分たちの近所にそれをやっている人たちがいる、ということが伝わればいいなと。

菊之丞：むしろ子供たちにはそういう境目の感覚がないですね。大人はやはり自分の中に何か基準をもった状態で新しいものに接するわけだけど、子供たちにはそれがないから、どこの国のどんな踊りでも全部同じ感覚で受け入れられる。

福留：「地域の先輩」が実際に子供たちの前で踊ってみせた時の説得力はすごかったですね。一瞬でわかるというか、体から体に伝わって、そこから興味が芽生えていくのを感じました。

菊之丞：どんな踊りでも、基本的には理に適ったものだと思うんです。例えばカポエイラだったら、向かって来るものをよけるとか、最短距離で動くとか、体の理屈が内包されている。あるいは中国舞踊だったら、溜め込むようにして動いていく。言葉で説明しても子供たちには面白くないけど（笑）、実際に動いてみると経験として積み重なっていきますね。その場では何だかわからなくても、時間が経ってまた違う何かに触れた時に、ここでの経験が指標になる可能性がある。そういう指標を、潜在的に、いくつも持てるのは贅沢なことじゃないかと思います。もちろん何年も、あるいは一生出てこないものもあるだろうけど、無駄ではない。必ず積み重なっていると思います。

ストウミキコ：ADDでの経験が、その子なりの体のあり方や思想のきっかけにつながっていったら嬉しいですね。ちなみに私は子供の頃、「将来何になりたい？」という質問が苦手だったんです。まだ世の中に何があるのかも知らないのに…って（笑）。

でも何かをやったから知ることができた、ということもある。だから、自分の意志でその踊りを選んだ人もいるし、菊之丞さんやファン・レイさんのように子供の頃に自分の意志ではなく始めたけど、そこで楽しいことをたくさん見つけたとか、そういう大人の話を聞けるのがいいなと思ったので、毎回、冒頭で講師の皆さんに「どうしてこの踊りを始めたの？」という質問に答えてもらうようにしました。

—— 多様な踊りを子供たちに橋渡しするストウさんのファシリテーションは巧みでしたね。

福留：違った踊りをシャッフルするということが自然に行われているのがアツかった。例えばフラメンコで、手を牛の角の形にして動き回るというのをやった時には、菊之丞さんや大人たちも一緒にやっていて、色々な踊りが同時にあることの意義をすごく感じました。

ストウ：子供たちが普通に習っている時も、後ろの方で、経験を積んだ大人たちが違った風に体を使って、リミックスを繰り広げているのが面白かったです（笑）。

菊之丞：そもそもの話をすれば、日本舞踊にしても、とくに明治以降は既にバレエなど海外の影響を受けていますからね。例えば「伸びる」っていうことにしても、中国舞踊だと丸みのあるイメージで、それは日本舞踊も全く一緒なんだけど、演目によってはピーンとまっすぐ伸ばしていく。ロシアからバレエ団が来日するようになって、その影響を受けていたりするんです。踊りって、こうじゃなきゃいけないってことはない。それに根源的なものはそもそも全部つながっているというか、ルーツは同じですからね。人間が生きて行くには食物が必要で、それが得られるようにと祈りを捧げるとか、神様と少しでも何かを交わしたくて、それが体を動かすことにつながるとか、古い時代から脈々と、踊りはつながっているわけですから。

—— 成果発表では、「鳥獣戯画」を題材にするアイデアが効果的でした。

福留：子供にもわかりやすいし、教える大人の側もそれぞれの踊りの中から動物の要素を出して来れる。すごくいい選択でしたね。

菊之丞：もう少し時間があったら、正木さんがフラメンコでやっていた牛は、どんな牛なのかな、っていう具体的なイメージにまで入っていきたかった。カポエイラのカエルだったら、あの後ろ蹴り、あるいはカエル飛び。あれを使って何かするとかね。

福留：ファンさんが鳥の歩き方を説明する時、「雲の上を歩いてる」感じという言い方をされていて、結構伝わるなと。雲の上を歩くって想像すると、踵から先に着くっていう現実的なこと以上の、体の感覚としての「ふわっと」感が子供たちにも伝わる気がしました。

菊之丞：そう、イメージで伝えるって重要なことなんです。それに動物の仕種だったら子供たちも具体的にイメージできる。「かちかち山」だったら「熱い！」とかね。熱いから火を振り払おうとする、っていう動きを自分なりにやれば踊りになる。それが踊りの自由なところじゃないかな。

トリニダード・トバゴのダンス「ベレ」を習う。女性の踊りはフレアスカートで優雅に

ADD国立市

プロジェクトニックネーム

「ほうかごダンス隊」

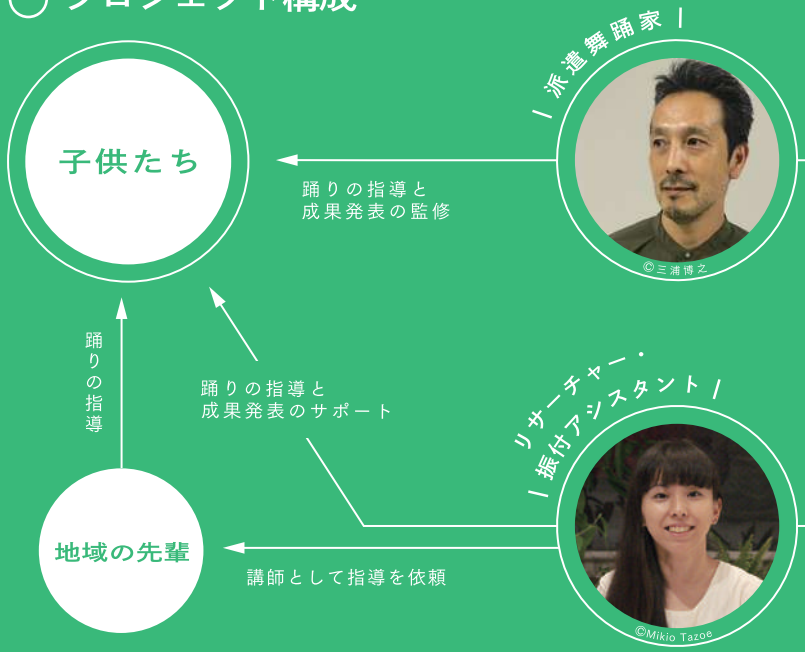
◯ 実施拠点

くにたち市民芸術小ホール（東京都国立市富士見台 2-48-1）

くにたち市民芸術小ホールは、約300席の舞台ホール、ギャラリー、スタジオ、音楽練習室、アトリエなどを備えた公共施設。「くにたち文化・スポーツ振興財団」が運営を担う。発表会や展示といった市民の芸術活動に利用されている他、主催事業としてコンサートや映画上映会、演劇・ダンス公演、落語、ワークショップなどを数多く展開している。「くにたち市民総合体育館」も隣接している。

https://kuzaidan.or.jp/hall/

◯ プロジェクト構成



→ p.24 に詳細

じゃれお おさむ
砂連尾 理（ダンサー・振付家）

1991年、寺田みさことダンスユニットを結成。2002年、「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」（グランプリ）、「オーディエンス賞」をW受賞。2008年度文化庁・在外研修員として、ドイツ・ベルリンに1年滞在。近年はソロ活動を中心に、しょうがいのある方や高齢者とのダンスも展開している。著書に『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉―ダンスのような、介護のような―』（晶文社）。立教大学現代心理学部・映像身体学科 特任教授。

きむら れいな
木村 玲奈（ダンサー・振付家）

2008年よりショーネッド・ヒューズの作品に関わる。2012年、「国内ダンス留学@神戸」振付家コース1期修了。環境や言葉においての身体の変化や状態、人の在り方に興味を持ち、国内外様々な土地で創作を試みている。「横浜ダンスコレクション2014」および「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2014」ファイナリスト。2019-2020年度セゾン文化財団ジュニア・フェロー。

音楽（発表会）：片岡祐介、安藤容子　アシスタント：大園康司、豊田ゆり佳
制作：村松薫　ロゴデザイン：岡崎デザイン
共催：公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団

ADD国立市
リサーチ＆ワークショップの記録

木村玲奈＋武藤大祐

1 リサーチ

国立市は大学などもある文教地区で、独自のコミュニティ活動を展開している個人や団体も多い。ADD国立市の実施拠点となった「くにたち市民芸術小ホール」では、バレエ・ジャズダンスの練習や発表会のほかに、主催事業としてコンテンポラリーダンスのワークショップも行われている。

リサーチを進める中で、小中学生のダンスチーム「LOCK★SHOW」と出会うことができ、さっそく市立国立第六小学校での練習を見学させて頂いた。もとはこの小学校のクラブ活動として始まったもので、佐藤華（さとうはな）先生（現在は別の学校の教員）がダンス未経験の子供たちを指導しているが、現場ではむしろ子供たち主導で稽古を進めているのが印象的だった。

谷保天満宮では、砂連尾理さんが9月の例大祭にて古式獅子舞を見ることができた。三匹獅子舞は関東地方に多いが、これは平安時代にまで遡る古い形だという。禰宜の津戸弘樹（つどひろき）さんのご紹介で、この獅子舞に興味を持って毎年見に来るというトリニダード・トバゴ出身のモリース・モランスィさんにも出会うことができた。モリースさんはALT（外国語指導助手）として府中の高校に勤務しているそうで、トリニダード・トバゴの踊りを子供たちに教えてもらえないか尋ねてみたところ、都内で働く同郷の友人と一緒なら、と引き受けてくださった。

農作業を楽しみたい人が集まる「くにたちはたけんぼ」。様々なイベントも開催している

本をテーマにしたコミュニティ・スペース「国立本店」で、会員の皆さんにお話を聞く

一橋大学は、競技ダンス部なども有名だが、先生方にもユニークな存在が多いようだ。「芸術小ホール」でダンスのワークショップに参加されたことがある社会学部の鈴木直文（すずきなおふみ）先生は、ラクロスの元スコットランド代表という珍しい経歴の持ち主で、スポーツと社会包摂が研究テーマ。非常勤講師の長谷川智（はせがわさとし）先生は現役の山伏で、大学では古武術等について教えているという。どちらもいわゆる「ダンス」とは違うが、ラクロスは元をたどると北米先住民の宗教的な儀礼であり、修験道も神楽などの芸能と結びつきが深いので、ワークショップをお願いした。

国立市では、さまざまな教育関係者とダンスの接点があることが見えてきた。

2 ワークショップ

ADD国立市の実施拠点「くにたち市民芸術小ホール」では音楽・演劇・落語・ダンスなどの様々な催しを行っている他、音楽練習室やスタジオ、アトリエなどもあって、市民に親しまれている。1階のロビーは開放されていて、放課後は子供たちが勉強やゲームをしに集まってくる。児童館ではないが、子供たちの居場所として機能しているようだ。

ワークショップ「ほうかごダンス隊」は、おもにホールの地下にある音楽練習室で行ったが、必要に応じて、隣接する「くにたち市民総合体育館」をお借りすることもあった。小ホールの斉藤（さいとう）かおりさんには、企画に賛同して頂き、会場の手配を助けて頂いただけでなく、地域に密着した文化施設の特色を生かして、ADDを国立市の皆さんとつないで頂いた。「ほうかごダンス隊」は事前の申込みで早々に定員となり、毎回続けて参加してくれる子供たちが多かった（ただしコロナ禍による中断が長引いたため、再募集となり、顔ぶれはかなり入れ替わった）。また様々な障害のある子が、ごく自然に、全体の中にとけ込めている様子も非常に印象的だった。

国立市では砂連尾理さんによる、ちょっと変わったダンスのワークショップから始まった。互いの目を見て挨拶をするようなワークや、全員一列に密着してウェーブを作る「ワカメ」のダンスなど、特定のジャンルのダンスを学ぶというより体を使ったコミュニケーションの可能性を子供たちに体験してもらった。また当時、ADD国立市の制作担当である村松薫（むらまつかおる）さんはお腹に赤ちゃんがいたので、砂連尾さんは「お腹の中の赤ちゃんに向けて踊ってみよう」と課題を出し、みんなでダンスを考えて踊ってみるという場面もあった。リサーチャーの木村玲奈も、自身の故郷である青森の伝統的な踊りを教えた。

ラクロスの鈴木直文さんには、ラケット操作の基本を教えて頂いたほか、ラクロスというスポーツの文化的な背景を映像とともに解説して頂いた。さらに砂連尾さんのアイデアで、ラクロスの動き

小学校の先生でもある佐藤華さんから、リズムに乗って動くダンスの楽しさを教わる

ラクロスのラケットの使い方を探る。「ゲーム」と「ダンス」の境目が薄れていく

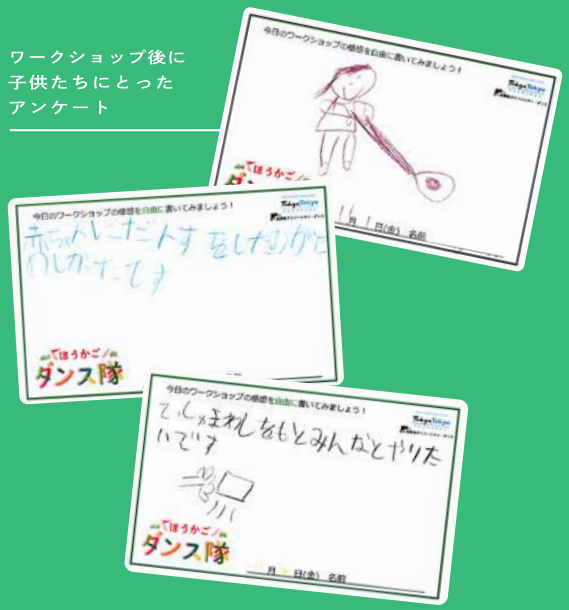
ベレには男性と女性それぞれの踊りの他に、みんなで踊る輪踊りもある

に音楽や「動物のまね」など異質な要素を組み合わせてみるという課題にも子供たちは挑戦した。

「LOCK★SHOW」の佐藤華さんは、まずカスタネットを使って、リズムをつかまえるウォーミングアップを行い、その後ヒップホップがベースになった振付をみんなで習った。最初は恥ずかしがっていた子も、徐々に楽しくジャンプし始める。音楽・リズムが持つ、人を踊らせる力がひしひしと感じられた。

トリニダード・トバゴ出身のモリース・モランスィさんには、同郷のズィア・ホールダーさんと一緒に、同地の民俗舞踊である「ベレ」を教えて頂いた。「トリニダード・トバゴってどこ？」と聞いても子供たちはわからなかったが、「カリブの海賊」のあの「カリブ海」の国だと知って目を丸くしていた。ベレでは、女性はフレアスカート、男性は布を持って、それぞれ異なるステップで踊る。子供たちも風呂敷をそれぞれ受け取って、まずは男女にわかれて練習。最後に音楽と合わせて短い振付を踊った。講師のお二人も、自国の踊りを日本で教える珍しい経験を楽しんでくれていた。

ワークショップ後に
子供たちにとった
アンケート



砂連尾理さんのワークショップでは、特定のジャンルの踊りを教えるのではなく、体を使ったコミュニケーションを様々に楽しむ。遊ぶことを通して学ぶ

3 再始動：創作ワークショップ

国立市では８回目のワークショップを終えた頃にコロナ禍で中断し、1年３か月の後、オンラインと現地開催を組み合わせて再始動。４回のプログラムを実施した。集まった６人の子供たちに踊りを教えて頂いたのは、前回に引き続き佐藤華さん（ヒップホップ）、そして新たに大竹美奈子さん（盆踊り）、カレフア吉田さん（フラ）、久保田正美さん（身体表現）。さらにモリースさんに教わったベレを砂連尾さんが教えた。

ワークショップは毎回、前半で踊りの基本を教わり、後半ではコロナ禍の状況をふまえた講師の皆さんから子供たちへのメッセージ（「いいふうに考えればいいんじゃない」「あきらめないでいこう」など）から子供たちがオリジナルの振付を考える、という構成。砂連尾さんやスタッフのサポートを受けながら、子供たちが考えた振付も全員でしっかりと練習した。

遠隔だが、家族と一緒にリラックスして楽しんでくれる子供たちが多かった

普段はコンテンポラリーダンスの大人たちもフラに挑戦。吉田さん親子によるレッスン

4 発表会

くにたち市民芸術小ホールのメイン施設である「ホール」を会場に、保護者や関係者を招いて実施。子供たちが、盆踊り、ベレ、フラ、そして自分たちのオリジナル振付を、講師の皆さんや砂連尾さんとともに踊った。ゲストの片岡祐介さんによる即興演奏（ピアノ、打楽器）、さらに地元から安藤容子さん（サックス）も参加して、子供たちのパフォーマンスを楽しく盛り上げた。

そして最後に、客席後方から久保田さんが登場。型のない踊り、あるいは得体の知れない動きや佇まいに子供たちは自由奔放なリアクションで応じ、不思議な盛り上がりを見せて閉幕となった。

習った踊り、自分たちで考えた踊りを次々こなしつつ、ハプニングも多発して楽しい舞台になった

ADD 国立市ワークショップ「ほうかごダンス隊」

会場：くにたち市民芸術小ホール、くにたち市民総合体育館　対象：国立市在住の小学3～6年生　参加費：無料・要事前申込

参加募集コピー：

この街のいろんなダンスを体験して自分だけのお気に入りに出会っちゃおう！
新しい部活動「ほうかごダンス隊」参加者募集！
Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル 13「放課後ダイバーシティ・ダンス」では、ADD 国立市ワークショップ「ほうかごダンス隊」をスタートします。2020年の夏に向けて、くにたち市民芸術小ホールでは、毎月さまざまなダンスに出会えるワークショップを開催していきます。プロのダンサーや、国立市の地域文化を支えるさまざまな方々（地域の先輩）から、さまざまなダンスを学んでみませんか？ ダンス経験がある人もない人も、しょうがいのある人もない人も参加できます。
★普段からダンスをやっているキミは、さまざまなジャンルのダンスを体験してさらなるスキルアップに！
★はじめてダンスに挑戦するキミは、カラダを動かすことの楽しさにハマっちゃうかも？

ワークショップ募集チラシ

リサーチ

2019年4月～9月

ワークショップ

第1回　2019年9月27日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）
第2回　2019年10月4日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、木村玲奈（コンテンポラリーダンス）
第3回　2019年11月1日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、村松薫
第4回　2019年11月15日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、鈴木直文（ラクロス）
第5回　2019年12月13日（金）　講師：佐藤華（ヒップホップ）
第6回　2020年1月17日（金）　講師：鈴木直文（ラクロス）
第7回　2020年1月31日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）
第8回　2020年2月21日（金）　講師：モリース・モランスィ＆ズィア・ホールダー（ベレ）
第9回　2020年2月28日（金）　講師：谷保天満宮獅子舞保存会［中止］
第10回　2020年3月20日（金）　講師：長谷川智（修験道）［中止］

ワークショップ（再始動）＋発表会　＊第1･2回はオンライン開催

第1回　2021年5月17日（月）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、佐藤華（ヒップホップ）
第2回　2021年5月21日（金）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、カレフア吉田（フラ）
第3回　2021年5月24日（月）　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、久保田正美（身体表現）
第4回　2021年5月29日（土）　関係者向けの発表会　講師：砂連尾理（コンテンポラリーダンス）、大竹美奈子（盆踊り）、佐藤華（ヒップホップ）、カレフア吉田（フラ）、久保田正美（身体表現）

ADD国立市ワークショップ講師「地域の先輩」

鈴木 直文 すずき なおふみ

一橋大学大学院社会学研究科教授。スポーツとソーシャルインクルージョンを研究。ラクロス元スコットランド代表。ソフトラクロスを子供たちに教えるイベントや、学生と新しいオルタナティブスポーツ作成を行う等、スポーツの枠を溶かしながらスポーツの場を Self-expression（身体で自己表現する）できる場所にしていきたいと考える。現在、ダイバーシティサッカー協会代表。

佐藤 華 さとう はな

小学校教諭。国立市立国立第六小学校在任中のダンスクラブ指導をきっかけに、保護者と協力してダンスチーム「LOCK★SHOW」を立ち上げる。「LOCK★SHOW」ではHIPHOP、ジャズ、ロックダンス等を取り入れているほか、子供たち自身も振付を行い、ストーリーやテーマ性のある創作作品を発表。国立市出身、在住。

モリース・モランスィ

トリニダード・トバゴ共和国出身。西インド諸島大学人文学部フランス語科と言語学科卒業。大学時代、合唱部の活動で《クレイジー・フォー・ユー》《アイーダ》《サウンド・オブ・ミュージック》等のミュージカル、卒業後は《レント》《リトル・ショップ・オブ・ホラーズ》《ザ・ウィズ》に参加。6年前に来日し、東京都立府中工業高等学校にJET講師として勤務している。盆踊りが得意。

カレフア吉田 かれふあ よしだ

フラ／オリタヒチ講師。2008年より国立市内にてスクールを開校。指導をしながら、自身もダンサーとして、2009年、日本最大のコンペティションであるTahiti Heiva in Japan個人部門にて優勝。現在、国立市民体育館事業や後進の指導などにも携わっている。

大竹 美奈子 おおたけ みなこ

9月6日生まれ（おとめ座）。立川生まれ・国分寺育ち・国立在住30年。3歳よりバレエ・モダンダンス・日舞などを習い、10代後半からバックダンサー等を経て数々の踊りを踊り散らかし、現在は盆ダンサーとしてあちこちの盆踊りに参加。好きな物はおはぎ。

久保田 正美 くぼた まさみ

静岡県富士市出身。国立市にて「からだの学校」主宰。剣道初段。ヨガや野口整体、気功なども学ぶ。寺山修司主宰の演劇実験室「天井桟敷」に出演。趣味は登山や散歩やイラストやギターやビール飲むことや読書。ダンスパフォーマンス歴50年、しかし踊りはうまくありません。

ADD国立市対談

「ダンスの根源的なことは プロでなくても伝えられる」

砂連尾 理 …… 派遣舞踊家

×

木村玲奈 …… リサーチャー／振付アシスタント

―― 全体を振り返って、いかがでしたか。

砂連尾理：企画の最初の段階から、このプロジェクトでは地域に密着することが必要だという話をしていたけど、まさにそれが結実したと感じています。自分自身は、これまでも舞鶴の特別養護老人ホームとの現在に至る10年以上もの関わりや、東日本大震災の被災地で地域社会と関わる経験をしてきましたし、NPO法人DANCE BOXが神戸・新長田を中心にダンスを通して地域と関わっている活動に少し関わらせて頂いたりもしました。今回は自分が国立に移り住んできたばかりということもあって、ワークショップに参加している子供たちや親御さんとはふだんから街中でも会ったりするし、時間が経つにつれてワークショップ以外での関係性も生まれていきました。自分と地域との関わり方が徐々に熟していったというか。ダンスを考えることが、ダンスを生み出す関係や環境、ネットワークなどを考えることにつながりましたね。

木村玲奈：私も地域の人たちと関わるプロジェクトをいくつか経験してきたので、難しさは承知でした。でも国立は砂連尾さんが住んでいるという事実があるから、実際に砂連尾さんがどういう風に人とつながっていくのかをメタに観察して楽しんでたところがあります（笑）。

砂連尾：そのポジショニングが上手いからぼくもリラックスしてやれたかな（笑）。連係プレイで。

木村：国立では、自分たちの仕事を自分で作ろうとしている独自性のある人たちにたくさん出会った気がします。とくに印象深いのは久保田正美さん。35年間、国立という街でどんな風に生きて来たんだろう、久保田さんが暮らしてきた国立ってどんな街なんだろう、という興味がわきました。

砂連尾：色んな方に「地域の先輩」として来ていただいたけど、皆さんアクが強い（笑）。いわゆる「アート」の世界にいる人たちではないんだけど、強烈な個性がある人たちに関わってもらえた。逆にいえば、今までの「アート」はそういう人たちとの関わりを自分たちの文脈から切り離してたというか。久保田さんも人生の話とか、子供にはちょっとワケのわからなそうな話をしたんだけど、理解できなくても、なんかヘンな人がいる、こんな大人もいる、ということにふ

れる経験が、大きい意味での「文化」を作っていくんじゃないかな。学校では教えない生き方をしている人たちに出会える場をADDで作れたと思う。

木村：街中では、面白そうな人がいても、怪しまれちゃったりしますからね。

砂連尾：芸小ホールでADDを担当してくれた斉藤さんが、そういう場作りを後押ししてくれたのも大きいです。例えば最終成果発表でサックスを演奏してくれた安藤容子さんも、斉藤さんから「ワークショップに参加する子供のお母さんだけど、彼女自身も演奏家ですよ」と教えてもらったんです。あまり経験がなかったらしいですが、楽しんでくれていましたね。こうやって人の輪が広がって、今後も面白いことを国立で色々できたらいいなと。

――「地域の先輩」にお声がけする時の、砂連尾さんの無茶振りもすごかったです。ラクロスの鈴木先生にダンスのワークショップをお願いしたり、トリニダード・トバゴのモリースさんとかも。

砂連尾：谷保天満宮の獅子舞を見に行ったら、禰宜さんと話しているモリースさんを見かけて、聞いたらトリニダード・トバゴの人だというので、とりあえず会ってみようと。現地にはどんな踊りがあるか聞いたら「ベレ」っていうのがあると。それ教えられますか？って。

木村：すごい（笑）。

砂連尾：そしたら、「いや、そんな自分なんか…」「いやいや、大丈夫だから」なんて言ってたら、彼の同郷の知り合いで踊りが得意なズィアさんと一緒にやってもらえることになったんだよね。

木村：ふだん踊りを教えているわけではない人が、「子供たちに教えてください」って声をかけたことで、ちょっと練習して来てくれるとか、楽しいですよね。表現をしている人も街に色々いるわけだし…。そうやって街の人を「地域の先輩」として見てみる、っていうのは重要だなと。盆踊りの大竹さんも、お仕事を持ちながら、踊りが好きで好きで続けてきたという感じですよね。でも、ダンスの根源的なことはプロじゃなくても伝えることができるのかもしれないと思いました。もちろん子供たちがプロに接して、技術的なことを教わるのもすごく重要なことだと思いますけど、そうじゃなくて、好きで踊ってるとか、もう少し「暮らし」のレベルで、習慣として、その人の体にあるダンス…そういうのを、「習う」というより「一緒に踊る」感覚ですね。そこに街とか人の可能性みたいなものを感じました。

――最後の成果発表でも、先生と子供たちが一緒に踊っていましたね。

砂連尾：専門性がない大人の場合、自分が誰かから習ったものをまた誰かに教える時に、教える／教わるっていう関係のヒエラルキーがあまり強くならない、というのはあるかもしれないですね。

久保田さんの予測できないアクションに、子供たちが惹きつけられる

地域を代表する郷土芸能「鳳凰の舞」。一度体験したら、見え方も違ってくるだろう

ADD日の出町

プロジェクトニックネーム

「ほうかごダンス教室」

◯ 実施拠点

日の出町立志茂町児童館（東京都西多摩郡日の出町大字平井 1254-1）

志茂町児童館は、日の出町にある唯一の児童館。中学生までの子供が対象で、図書室や遊戯室の他に、ボール遊びなどができる庭がある。また「じどうかん祭り」や「クリスマス会」といったさまざまな催しやクラブ活動も行っている。建物の2階は志茂町会館となっており、地域に伝わる志茂町囃子の稽古もここで行われ、平井川を挟んだ対岸の春日神社の祭礼で奉納される。

https://www.town.hinode.tokyo.jp/0000000121.html

◯ プロジェクト構成

→ p.34 に詳細

音楽（発表会）：齋藤真文（アラゲホンジ）
制作：韓ヨルム（ラオックス・メディアソリューションズ株式会社）
共催：日の出町

すがわら こはる
菅原 小春（ダンサー・振付家）

幼少期に創作ダンスを始め、小中高生の時に数々の有名ダンスコンテストで優勝、早くから注目を集める。2010年に渡米し、独自のダンススタイルが高く評価され、Rihannaなどのトップアーティストのバックダンサーとしてのキャリアを積み、海外でも一目置かれるダンサーとなる。2015年スティービー・ワンダーとのCM共演が話題となり、2016年、2017年と自らが演出を行った単独公演SUGAR WATERを成功させる。また、2016年の紅白歌合戦で坂本冬美、鱠川実花、2018年の紅白歌合戦では米津玄師との共演。NHK2020応援ソング「パプリカ」では振付を辻本知彦と共作する。2018年には黒田育世の舞台「ラストパイ」で主演、2019年NHK大河ドラマ「いだてん」にも出演し、女優としても活動の幅を広げている。現在までに世界35ヵ国以上を一人で飛びまわり、ワークショップやショーを行う傍ら、TVCM、ラジオ、ファッション誌などにも登場。

振付アシスタント：髙中梨生

なかにし れもん
中西 レモン（アーティスト）

主な活動として盆踊りのフィールドワークをはじめ、展示・パフォーマンスなど。現在は歌・踊り・図像をもとに「文化の移入と変容」をテーマとしたアートワークを行っている。郷土芸能に取材した絵画展「掛唄」（2002年）。ダンス・パフォーマンスに関する上演企画「畳半畳」（主催 2004～2014年）。滋賀県発祥の盆踊り唄・江州音頭を学習する会として、初代桜川唯丸江州音頭通信講座・モノガタリ宇宙の会（世話人 2015年～）。江戸期に中国より輸入された絵画技法書を教科書とした絵画勉強会「懐烟画譜」（画家・高村健志との共催 2016年～）。瓦版などで流布した庶民の歌などを読み解く勉強会「庶民の芸能を読む会」（2017年～）。参加「習いに行くぜ！東北へ!! 鮫神楽を習う」（2017年～）。編集に『インタビュー・資料集　豊島の盆踊り音頭』（2014年、てしまのまど）など。

ADD 日の出町
リサーチ＆ワークショップの記録

中西レモン＋武藤大祐

1 リサーチ

東京都西部の多摩地区に位置する日の出町は豊かな自然が広がる。ADDのアドバイザー・佐藤美紀（さとうみき）の、同町在住の親戚から伝手をたどり、様々な踊りに関わる方々とお会いすることができた。

日の出町は郷土芸能が多く残る土地柄で、「日の出町郷土芸能保存会」の会合でご挨拶させて頂き、折々の行事や稽古を見学した。

国指定重要無形民俗文化財「鳳凰（ほうおう）の舞」は、例年9月に春日神社の例大祭で奉納されている。子供たちが歌舞伎風の台詞を次々に披露する「奴（やっこ）の舞」と、大人たちが太鼓の周りをぐるぐると舞う「鳳凰の舞」からなる独特の芸能だ。

近年「ひらい祭り」と称し、この春日神社の例大祭に旧平井村地域の5つの囃子連が一堂に会して五人囃子（笛・太鼓・鉦）と踊りの競演を行っている。囃子連はそれぞれ特色があり、「志茂町囃子」は、地域の強い結びつきの中で、明治期以来の囃子の忠実な継承と見せ方の工夫に努めている。比較的新しい「桜木囃子」は地区を問わず新規の移住者も積極的に受け入れている。

「鳳凰の舞」は町内各所を巡行した後、春日神社へ。秋の訪れを告げる風物詩

イオンモール日の出のロビーは、子供たちがダンスを披露する「広場」の役割を担う

郷土芸能に関わる子供たちが多い一方で、更に別のダンスに接する機会もある。ADD日の出町の実施拠点である町立の「志茂町児童館」ではクラブ活動としてフラダンス教室を設けている。またヒップホップを習っている子供にもしばしば出くわす。日の出町にはMUSKYというダンス教室がある他、町の青少年委員会でも小学生対象の「ヒップホップダンス教室」を主催していて、7月にはその成果発表を兼ねた「Let's! ダンス・ダンス」というイベントが町内のイオンモールで開催されている。ここにはMUSKYや、近隣の市町村の高校ダンス部などもエントリーしており、毎年盛り上がりを見せている。

古くからの郷土芸能が多く残る日の出町は、ヒップホップ・カルチャーの一つのハブにもなっている。

2 ワークショップ

ADDを日の出町で展開するにあたっては、「志茂町児童館」のスタッフである小峰知緒理（こみねちおり）さんがまず興味を示してくださり、町の子育て福祉課で児童館担当の小森公夫（こもりきみお）さんには何かれとなく支えて頂いた。

児童館には、放課後の子供たちが集い、前庭でボール遊びをしたり、図書室で本を読んだり、遊戯室で卓球をしている。リサーチャーの中西レモンはたびたび顔を出しては一緒に遊んで（遊ばれて）いる内に、街中でも子供たちから「レモン！」と呼びかけられる存在になっていた。

ADDのワークショップ「ほうかごダンス教室」は児童館内の遊戯室をメインに、建物の２階（志茂町会館）の座敷、さらには町立の「やまびこホール」でも実施した。

ADD日の出町のワークショップは、初回に菅原小春さんの登場で勢いよくスタートした。音楽に合わせてドンドンと踊る菅原さんに導かれ、子供たちのテンションも一気に高まる。形ではなく「音楽と一つになる」ことが強調され、決まり事に捉われず自分の感覚で自由に動くことを子供たちは新鮮に味わっていた。「一人で踊ってみたい人？」という菅原さんの呼びかけに応じて、最年少５歳の女の子がやまびこホールの広い空間でたった一人踊ってみせるという場面もあった。

児童館でフラを教えているロケラニ和子（かずこ）さんには、基本のステップや、手で様々な形や風景を表現する動きを教えて頂いた。ロケラニ和子さんは地元のハワイアン・バンド「ブルー・パラダイス」とも活動を共にしており、日の出町のハワイアンシーンの一端も垣間見られた。

鳳凰の舞保存会の皆さんは、通常は男子のみの「奴の舞」を今回特別に女子にも教えて頂いた。ワークショップ参加者で保存会にも参加している子にはお手本に立ってもらい、扇や棒を使いながら大股で一歩ずつ前進する動きを全員で揃えた。玉の

ロケラニ和子さんにフラの基本を習う。ゆったりした動きと、ジェスチャーによる意味表現

「玉の内風祭獅子舞」は太鼓を叩きながら動く。忙しい反面、リズムの手がかりになる

古い芸態の忠実な継承に取り組む志茂町囃子。保存会の子供たちは教える側に回った

内獅子舞保存会の皆さんの回では、腹部に括りつけた太鼓を叩きながら舞うため、練習用の太鼓を中西レモンが製作した。道具を持つことで、子供たちは一段と練習に夢中になっていた。桜木囃子保存会の皆さんは、普段から初心者の子供たちに教えておられることもあり、明快でスピーディーな説明が印象的。子供たちは短時間で「ひょっとこ」の踊りを一通り覚えてしまった。志茂町囃子保存会の皆さんは本格的な囃子の演奏付きで教えてくださった他、ワークショップに参加していた兄弟が、保存会の一員として教える側に回った。本人たちにも、また彼らから習う子供たちにとっても、新鮮な体験になったようだ。

MUSKYダンススタジオからはFUUMINさんによるストリートダンスの基礎を。バレエを教えておられる長谷川和子（はせがわかずこ）さんには基礎の姿勢や歩き方を教えて頂いた。体験してみて、バレエを習ってみたいと話してくれる子も出て来た。

ADDのアドバイザー・佐藤美紀によるコンテンポラリーダンスの回では、動きの型が決まっていない、自分たちで動きを作っていく体験をしてもらった。リサーチャーの中西レモンも、ゲストのにゃんとこさんとともに、古い盆踊りを振り帳から復元してみる作業を子供たちと楽しんだ。総じて子供たちの関心は高く、連続して参加する子供たちの割合が大きかった印象である。

ワークショップ後に
子供たちにとった
アンケート

開始と同時に、子供たちの緊張を一瞬で解いてしまう菅原小春さん。音楽に乗って、気分を盛り上げ、全身で大きくダイナミックに動く楽しさへと導いていく

3 再始動：創作ワークショップ

日の出町ではすべてのワークショップが終わり、ダンスの創作に参加するメンバーがちょうど確定した頃、コロナ禍により中断。1年3か月もの休止期間を経て、オンラインで再開した（様々な事情で継続できないメンバーも出てしまったが、沖縄に移住した子がオンラインのおかげで参加することができた）。計15人の子供たちが自分たちで振付を考える作業に挑戦した。

都内のスタジオと各家庭をZOOMでつなぎ、菅原小春さん、アシスタントの髙中梨生（たかなかりお）さん、そして中西レモンの3人によるワークショップは3日間。まずワークショップで習った踊りを思い出す作業を軽く行った後、自分で考えた動き（ADDで覚えた動きや、日常生活の中の動き）のモチーフを3つずつ持ち寄ってもらい、これを素材としてオリジナルのダンスを作ることにした。

子供たちと久しぶりの再会。15か月の間にみんな大きく成長していた

動きの素材を大胆にアレンジする菅原小春さん、巧みに音楽と組み合わせる髙中梨生さん

4 発表会

子供たちから出てきたモチーフを、髙中さんが中心となってダンスのフレーズへと整理し、菅原さんとともに音楽に合うようつないでいった。音楽は、日の出町で録音した「志茂町囃子」、「鳳凰の舞」、ブルー・パラダイスの演奏を、ミュージシャンの齋藤真文（さいとうまさふみ）さんがリミックスしてつないだオリジナル音源である。

記録映像を使った復習の甲斐もあって、フラや「鳳凰の舞」の動きも少し入った、約5分間の振付が完成。ZOOMの画面越しではあるが、全員で最初から最後まで通して踊ることができた。

個性豊かな子供たちが集まり、爆発的な盛り上がりに。いつか舞台で踊りたい作品が生まれた

ADD 日の出町ワークショップ「ほうかごダンス教室」

会場：日の出町立志茂町児童館、日の出町やまびこホール
対象：日の出町在住の小学生・中学生
参加費：無料・要事前申込

参加募集コピー：

菅原小春がやってくる！ダンス教室 参加者募集！
Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13「放課後ダイバーシティ・ダンス」では、ADD日の出町ワークショップ「ほうかごダンス教室」をスタートします。日の出町でダンスに関わるさまざまな方々（地域の先輩）と、派遣舞踊家の菅原小春が講師となって、地域の子供たちにダンスを教えます。ダンス経験がある人もない人も参加可能です。さらに教室での経験を活かし、菅原小春とのダンス作品づくりにも挑戦できます！

ワークショップ募集チラシ

リサーチ

2019年4月～9月

ワークショップ

第1回　2019年10月3日（木）　講師：菅原小春（コンテンポラリーダンス）、ロケラニ和子（フラ）
第2回　2019年10月26日（土）　講師：玉の内獅子舞保存会
第3回　2019年11月16日（土）　講師：中西レモン（盆踊り） アシスタント：にゃんとこ
第4回　2019年11月30日（土）　講師：佐藤美紀（コンテンポラリーダンス）
第5回　2019年12月14日（土）　講師：菅原小春（コンテンポラリーダンス）、鳳凰の舞保存会
第6回　2019年12月21日（土）　講師：桜木囃子保存会
第7回　2020年1月18日（土）　講師：MUSKYダンススタジオ・FUUMIN（ヒップホップ）
臨時開催　2020年1月22日（水）　講師：長谷川和子（バレエ）
第8回　2020年2月1日（土）　講師：菅原小春（コンテンポラリーダンス）
第9回　2020年2月8日（土）　講師：志茂町囃子保存会

ワークショップ（再始動）＋発表会　＊すべてオンライン開催

第1回　2021年5月23日（日）　講師：髙中梨生（コンテンポラリーダンス）
第2回　2021年5月29日（土）　講師：菅原小春（コンテンポラリーダンス）
第3回　2021年5月30日（日）　講師：菅原小春（コンテンポラリーダンス）

ADD 日の出町ワークショップ講師「地域の先輩」

ロケラニ和子 ろけらに かずこ

日の出町出身。健康と地域のためにできることをと思い、以前より興味を抱いていたフラダンスに挑戦。教室に通いながら知人を誘い、現在は地元フラダンスチーム「レイナニレフアひので」のリーダー兼指導者として、地域のハワイアンバンド「ブルーパラダイス」とジョイントしながら地元を中心に活動。

玉の内獅子舞保存会 たまのうちししまいほぞんかい

関東を中心にみられる、頭部に獅子頭をかぶり、腹部に太鼓を括り付け、三匹が同時に舞う様式の三頭立て獅子舞で、日の出町では唯一の保存団体である。かつては雨乞いなどにも奉納され、現在は毎年8月の第二土曜日に、町内玉の内地区の三嶋神社例大祭で奉納されている。町指定重要無形民俗文化財。

佐藤 美紀 さとう みき

ダンサー、振付家としてカナダやオランダ、香港をはじめ国内外のプロジェクトに多数携わる。その時の経験をもとに、コンテンポラリーダンスを軸としながら、プロデューサー、ファシリテーター、コーディネーターとしても多様に活動する。日の出町で103歳まで元気に過ごしていた祖母を持つ。

鳳凰の舞保存会 ほうおうのまいほぞんかい

下平井の鳳凰の舞は、奴姿の子供たちが扇と木刀を持って演じる「奴の舞」、太鼓にあわせて勇壮に舞う「鳳凰の舞」から構成される他に類例のない民俗芸能であり、かつては雨乞いに行われた。国指定重要無形民俗文化財。

桜木囃子保存会 さくらぎばやしほぞんかい

昭和61年、地元有志が小金井の貫井囃子保存会の指導をうけたところから始まる。日の出町唯一の目黒流祭囃子であり、童謡を織り込んだ囃子に、けん玉を取り入れた踊りなど、楽しく親しみやすいお囃子が持ち味。

MUSKYダンススタジオ・FUUMIN

高校時代に地元福岡でダンスを始め、3ヶ月後にはコンテストで優勝。そこから数々のコンテストで経歴を残し、九州最大のダンスバトルでは福岡代表に抜擢。上京しHIPHOPのLegend達の元でHIPHOPの基礎を学び、現在は関東の様々なスタジオでLessonを行っている。

長谷川 和子 はせがわ かずこ

日本バレエ協会正会員。プティ・エトワールバレエ主宰。元スターダンサーズ・バレエ団所属。国分寺にプティ・エトワールバレエスタジオを開設。1981年より日の出町大久野スタジオでの指導も行う。猫大好き。

志茂町囃子保存会 しもちょうはやしほぞんかい

江戸時代に現在の葛飾区で生まれた祭囃子は、江戸を中心に広がりを見せた。そうした囃子の一つとして、埼玉県所沢で古谷重松（ふるや じゅうまつ）により創始されたのが重松囃子である。志茂町囃子は明治18年、重松が当時の平井下宿に滞在し、地元の若者にその囃子を伝えたことに始まる。重松流祭り囃子は町指定無形民俗文化財であり、志茂町囃子保存会はその認定団体である。

ADD日の出町鼎談

「子供たちにとっての文化の地平」

菅原小春 …… 派遣舞踊家

×

中西レモン …… リサーチャー／振付アシスタント

×

髙中梨生 …… 菅原小春アシスタント

―― プロジェクトを終えて感想は？

菅原小春：楽しかったです。子供好きだし。というか、自分はどっちかといったら子供の側なんですけど。ダンスってすごくて、みんなダンスを踊ると色んな境界線がなくなる。国籍でも性別でも年齢でも。そういうことは子供が一番わかってますね。こっちが気付かされることが多かったです。そんなことあるのか！とビックリさせられて、私もまだまだオトナだな、なんて思ったり。

髙中梨生：子供たちから出てくる発想が自分には発見になりました。自分たちはやっぱり音に合わせて、リズムがどうとか考えちゃいますけど。動きを考える時に「観覧車！」とか言われて、「観覧車？」って、インスピレーションは色んな所にあるんだと教わりましたね。

菅原：今度から振付は子供と一緒にやった方がいいかもね。一番ワクワクする感じになるから。もしいつか自分がスタジオやるとしたら、子供が大人に教えるクラスも作りたい。

中西レモン：私はリサーチャーとして日の出町にお邪魔して、歩き回りながらだんだん地域文化を知っていくのが楽しいなと思いました。こういう企画はどうしても、ちょっと押しつけがましい感じになりやすいんですが、結果的に、地域の文化を担ってきた色々な方のご協力を得られたのはありがたかったですね。今回のような作業が継続できたら面白いことになるんじゃないかな。伝統芸能の存続が危ういのはどこも同じなんですけど、自分の体で体験してみる面白さがあるかないかでもかなり違うと思います。今回は伝統芸能の継承の「実験」みたいな面もあったように思うんです。企画の中で自分は「つなぎ」の役というのか、小春さんとのつながり、次世代とのつながり、そういう役割ができたらいいなと思いながら楽しませてもらいました。

菅原：私も「よさこい」とか踊ることがあるけど、そういうのもダンスも、結局は同じです。踊ることは魂を「捧げる」ことだと思うから。何か一つに「捧げる」っていうこと。境界線は全くない。

中西：ＡＤＤでは、小春さんのダンスと、身振りで伝えられた

伝統文化を同列に取り上げることができました。言葉で語るんじゃなくて、実際に体を動かしながら直接体験することで、子供たちにとっての文化の地平が広がったと思います。それぞれの時間の流れの中で出来てきたカッコよさというものがあるわけで。

―― ここしばらくダンスのブームが続いていますが。

菅原：みんな上手に人の関係の中に入って、携帯で動画を撮ったり、どうしてもダンスが表面だけになっちゃう傾向ってありますよね。でもダンスはそこで嘘をつけない。ワークショップでも、表面的になっちゃっている人をほどくのはすごく大変です。２時間じゃ絶対足りないし、疲れる。いやパワーはいつもあり余ってるんですけど。もしこれがマイケル・ジャクソンのオーディションだとしたら、そんな気持ちか？と。常に本番、今日は今日しかないから。緊張してると音も入って来ないし、スポンジの状態にならないから、それをワーッってやって、まずほどくんです。

中西：ＡＤＤでも小春さんの最初の回は、もう入ってきた途端に音を流してとにかくリズムで体を動かして、子供たちを渦の中に巻き込んでいく感じでしたね。

菅原：そうなんですよ。大人はどうしても概念が先に来るけど、これは良くてこれはダメってことはないんです、ホントは。「ダメ」じゃなくて、ユーモアを加えればいいのに、大人のユーモア不足ですよね。それで子供が概念に凝り固まって緊張しちゃう。だから、せっかく踊りに来るのにコノヤローって思って、そうやって渦に巻き込んでほどいていくんです。

中西：アーティストには「常識」のおかしさを暴いていっちゃうような性格もあるということを改めて思いますね。行動とかパフォーマンスで解体しちゃう。別の回では、子供たちに学校でどんなことをやっているか問いかけて、日常の動きを出してもらって、歩き続けながらその動きをやる。そういうところからでも振付は生まれるんだよ、って。踊りが形作られていく上での一つの「核」みたいな部分を子供たちにポーンって出していくのが面白かった。

菅原：表現なんて結局、やろうと思ったらいつでもどこでもできるんですよね。駐車場だって家だってステージになるし。イマジネーションでどこまででも行ける。

―― 小春さんが「一人で踊ってみたい人？」と呼びかけたら、一番小さい子が手をあげて、広い体育館で一人で踊ったのは、みんな驚きましたね。

菅原：ああやって凝り固まらずに、一人で踊る、一人で立てる人はすごいです。大事なことだと思う。毎日まっさらで生きてたら、つねに新しいことをして、楽しいことに向かっていってたら、もっと世の中ハッピーなんです。心を裸にするのはみんな怖いですよね。裸の心で喋ることはできない。でもダンスだったら、できるんですよ。

一番小さい子が手をあげ、音楽に乗って立派にソロを踊ってみせた

ADDに参加した皆さんの声

【港区】

「色んな国の踊りが知れて楽しかったです」
「中国の、鳥のダンスが一番楽しかった。
肩が疲れたけど、きれいだなと思いました」
「またやりたい」

子供たち

「オフィスワーカーなので、子供と一緒に何かをすることはあまりないんですが、今日やってみて、私も子供と踊れるなあと、自信をつけてしまいました（笑）」（バブリさん）

「アフガニスタンはちょっとイメージが怖かったり暗かったりするんですけど、大変な面だけでなく、こういう美しい文化とか、かわいいものとか、恋をしたり、幸せな時間がある、っていうことに気付いてもらえたら嬉しいなと思います」（上村さん）

アシュラフ・バブリさん
＆上村菜々子（かみむらななこ）さん

「ADD では地域の子供たちと踊りを通じた会話ができて貴重な経験となりました。特に私が担当したポップでは、技術的な踊りよりもイメージや言葉の表現によって動きを共有して踊りに繋げていく行為だったと思います。またそれが、形となりコミュニケーションに発展していく現象を間近で体験することができてとても幸せでした。土地と踊りが掛け合わさって人が繋がっていく美しさを感じることができました。最高です」

岩井隆浩（いわいたかひろ）さん

「先生たちがフランクに、親しみをもって教えてくれたので、子どもたちも『習ってる』というより純粋に『遊んでる』。だからこそ色んな種類のダンスや表現が染み込んでいくし、それを子どもたちが咀嚼して自分なりの形で表現していくというのが、すごくいい体験だなって思いました。遊び感覚だけど、最後はちゃんとステージがあって、緊張感、メリハリがありました。子どもたちからも『またやりたい！』っていう声が上がったので、うまく拾ってあげられるといいですよね。場を作ることで、機会を設けてあげたいなと思いますね」

山本博之（やまもとひろゆき）さん（麻布子ども中高生プラザ）

「子どもたちが、普段の遊んでる姿と違って、真剣な表情で取り組んでるのがすごく印象的でした。普段は新体操をやっている子が、カポエイラにハマった、って言ってくれています」

渡邉千里（わたなべちさと）さん
（麻布子ども中高生プラザ）

「子どもたちだけでなく私自身も、色々な国のダンスや文化に触れるいい機会になりました」 **麻生加奈子（あそうかなこ）さん**（麻布子ども中高生プラザ）

【国立市】

「砂連尾さんから ADD のお話を伺ったとき、大変うれしく二つ返事でお受けしました。というのも、当ホールを特徴づける事業として現代ダンスにちょうど取り組み始めていた時で、当分野の第一線で活躍するアーティストや専門家の方々と協働できる大きなチャンスであると感じたからです。また、『ダイバーシティ』の観点が地域ホールとして重要である中、なかなか具体的かつ継続的な事業につながっていなかったからです。

『地域の先輩』探しや、実行委員会の皆さんによるリサーチ、それを受けた参加募集、ワークショップと順調にプロジェクトが始まり、元気な子供たちが当ホールに通ってくれるようになりました。そして突然の思いもかけぬコロナ禍による事業中断。しかしながら知恵を出し合い、できることに取り組み事業実現へと結び付けた委員会の皆さんの思い、参加の子供たちおとなたちの存在に、ADD のみならずこれからの当ホールの在り方や方向に大きな示唆をいただきました。

現代ダンス、子供たち、地域にいる様々なおとなたち、そしてダイバーシティ。ADD が内包するさまざまな要素を展開させ編集し拡げるミッションを受けていると感じています。できることなら、国立市の文化芸術施策の柱としていければと夢を抱いているところです」

斉藤（さいとう）かおりさん（くにたち市民芸術小ホール）

「最初は、よく知らない国の踊りなんてあんまり興味がないんじゃないかと思ってたんですよ。でも実際始まってみると、子供たちが夢中になって私たちのダンスや文化を学んでくれて本当にビックリしました」（モリースさん）

「ダンスはたぶん、一番楽しく異文化を知る方法だと思います。だから子供たちが大人になって、ADDで習ったベレの歌を不意に思い出して、あれ？これはどこで聞いたんだっけ…なんていう風になるんじゃないかな（笑）」（ズィアさん）

モリース・モランスィさん
＆ズィア・ホールダーさん

「私自身、十年以上タヒチアン／フラ一筋でやって来たので、ここで他の踊りにふれたことで『ああこうやって教えるんだ』とか、創作のアイデアとか、とても刺激になりました」
（真渚さん）

「年齢や性別の垣根とか、ジャンルの垣根がないところで、みんなで新しいものにチャレンジしていくということが、自分の住んでいる所でできるのは、新たなコミュニケーションだなと思いますね」
（カレフア吉田さん）

カレフア吉田（よしだ）さん＆吉田真渚（よしだまな）さん

「難しかったけど、面白かった」
「みんなで創作ダンスをやって、
他の人が作ったのをやるのが楽しかったです」
「めっちゃ疲れたけど楽しかった」

子供たち

【日の出町】

「初めてのことだったので、どんな風になるか楽しみにやらせて頂きました。国指定の無形文化財ですから、世間の人みんなに知ってもらえれば幸せだなと思います。地域の伝統的なもので、昔から男の子にしか教えてこなかったので、女の子に教えるということはなかったのですが、いい機会だなと思いました」

宮野憲一さん（鳳凰の舞保存会）

「伝統芸能を地元だけでなく広く、色んな子供に知ってもらえたので、保存会ではみんな喜んでいました。こういう風な踊りや音楽があるんだなということを感じて頂いたのは嬉しいですね。現在のいわゆる『ダンス』とは違う踊りなので、それにふれることで、伝統文化がどんなものかを感じてもらえていたらいいなと思います」

青木勝之さん（志茂町囃子保存会）

「最初はどんな感じになるのかな、ってドキドキしてたところもあるんですけど、日の出町にある文化を使って踊りを作っていくということで、回数を重ねていく内に、こういうことだったんだ、って目に見えてわかってきました。子供たちの、普段とはまた全然違った豊かな表情が見られたので、やって頂いて感謝しています。どの回も印象深かったですが、とくに菅原小春さんの、子供たちを引き付ける力がすごいなと印象に残りました」

小峰知緒理さん（志茂町児童館）

「とても良い企画でした。子供たちにとっても財産になったと思います。本来であれば児童館の近くの子供だけでなく、町内全地域の子供も参加できるように、もっと大がかりにしても良かったと思うけど、対応できる施設がなかったのがちょっと残念でした。日の出町なら自然の豊かさを前面に出して、屋外実施するとか、天然芝のサッカー場で実施するとかも面白いと思いましたが、このコロナ禍の影響で日の目を見ることはありませんでした。ワークショップ終了後、バーベキューに行くとかも少し期待しましたが、とにかくコロナで遠隔になってしまったのがくやしい。今後については、運営主体になってくれるような、ちょうどいい若い人が出てきて、この続きをまたやれたらいいと思います」

小森公夫さん（志茂町児童館）

「楽しかったです。菅原小春さんのが楽しかった。難しかったけど、ダンスの中身が楽しかった」
「お囃子とか、小春さんの激しいダンスとか、色んなダンスが楽しかったです。フラダンスは、ゆったりとした、リラックス要素がある感じがした」

子供たち

Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13
放課後ダイバーシティ・ダンス（ADD）

ディレクター ……武藤大祐
プロデューサー ……林慶一
制作協力 ……ラオックス・メディアソリューションズ株式会社（LMS）
アドバイザー ……佐藤美紀
ADD港区 制作 ……岩中可南子、市川喜愛瑠
ADD国立市 制作 ……村松薫
ADD日の出町 制作 ……韓ヨルム
制作アシスタント ……萩谷早枝子

記録集デザイン ……関川航平
ドキュメンタリー映像監督 ……みかなぎともこ
記録写真 ……植田洋一、前澤秀登
（pp.2~4, 7, 8（上）, 10（上）, 11, 12, , 15~17, 18（上）, 20（中央）, 21, 22, 25~27, 28（上）, 31, 32（上・中央）, 35, 38, 39（一番下を除く）＝植田、p.30（上）＝前澤）

主催 ……東京都
公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
共催 ……港区麻布地区総合支所（ADD港区）
公益財団法人くにたち文化・スポーツ振興財団（ADD国立市）
日の出町（ADD日の出町）
企画・運営 ……ADD実行委員会

「Tokyo Tokyo FESTIVAL」とは

オリンピック・パラリンピックが開催される東京を文化の面から盛り上げるため、多彩な文化プログラムを展開し、芸術文化都市東京の魅力を伝える取組です。

「Tokyo Tokyo FESTIVAL スペシャル13」とは

斬新で独創的な企画や、より多くの人々が参加できる企画を幅広く募り、Tokyo Tokyo FESTIVAL の中核を彩る事業として、東京都及び公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が実施するものです。国内外から応募のあった2,436件から選定した13の企画を、「Tokyo Tokyo FESTIVALスペシャル13」と総称し、展開しています。

編集：ADD実行委員会　発行：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京　発行日：2021年8月22日
お問合せ：ADD実行委員会 ［MAIL］add2020.office@gmail.com［WEB］https://addance.net/

AFTER-SCHOOL
DIVERSITY
DANCE

ARTS COUNCIL TOKYO

TOKYO
METROPOLITAN
GOVERNMENT